

1. 製作時期

明治 39 年 7 月 26 日に執筆開始。同年 8 月 9 日脱稿。

「我輩は猫である」の脱稿から 10 日後に執筆を開始し、完成したのはその 2 週間後となる。

出展/ウィキペディア

2. 書誌情報

- 1906 年(明治 39 年)9 月 『新小説』に発表。
- 1907 年 『鶉籠(うずらかご)』に収録。
- 1914 年 春陽堂から単独の単行本が出版。
- 1917 年 漱石全集の第 2 巻に収録。
- 1971(昭和 46)年 4 月～1972(昭和 47)年 1 月
筑摩書房「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」に収録
- 1987(昭和 62)年 12 月 1 日第 1 刷発行
ちくま文庫、筑摩書房「夏目漱石全集 3」に収録

出展/ウィキペディア

3. あらすじ

30歳の青年画家が、詩を求めて旅に出る。出会う人たちを、自然の点景と認識し、能の所作に見立て、「美」か「美ではない」かを鑑識することに決める。青年は、そのような流儀を「非人情の旅」と名づける。

青年は、峠の茶屋で一休みする。茶屋の「婆さん」と、「源さん」(源兵衛)の話を耳にし、「那古井の嬢様」と「長良の乙女」のことを知る。「那古井の嬢様」は、京都に好きな人がいたが親が決めた城下の富豪の男へ一旦、嫁いだが、日露戦争の影響で男の勤め先の銀行が倒産し、実家に戻る。源兵衛は「那古井の嬢様」の城下への輿入れの時に嬢様が乗った馬を引いていた。

「長良の乙女」は伝承の女性で、2人の男から想われ、どちらにも決めることができず、川へ身を投げたといわれている。青年は、那古井へ向う。

那古井の志保田という宿屋に泊まることにした青年は、夜具の中で句を書いた。青年は、部屋を出ている間に、書き置いておいた句の下に句を書き足したものがいた。宿のお嬢様・那美に会い、惹かれていく。しかし、「非人情の旅」であるので、心を通わせまいと極力観察しようと努める。

青年は、床屋で理髪をしながら親方(主人)から志保田の出戻り娘(那美)は精神に異常をきたしているという話を聞き、那美が通っている観音寺の住職・大徹に話を聞きに行ったり、寺の裏の谷を越えた先にある、先代の志保田のお嬢様が身を投げたという鏡が池へ行き「筒袖を着た男」に会い、本当の那美を知ろうとする。

しかし、那美は思索にふける青年の部屋から見える縁側に振り袖姿で出現したり、風呂場から出た青年を待ち構えていたり、「御勉強ですか」と言って青年の部屋を訪れたりする。振り袖姿を見せたのは「山越えをなさった画の先生が、茶店の婆さんにわざわざ御頼みになったそうで御座います」などと、青年が返事に窮することを口にしては、「ホホホホ」と笑う。また、近々身を投げるかもしれないのでその様子をきれいな絵に描いてくれなどとも告げ、青年を翻弄する。

青年は、あてもなく、野山を歩いている時に、偶然、那美が野武士のような男と会っている姿を見かける。那美から直接、男は那美の元夫で満州に行くことになり、那美に金をもらいに着たことを告げられる。青年は、那美に誘われて、那美の兄の家に立ち寄る。

青年は、那美、那美の兄、那美の兄の家の老人、荷物を引く源兵衛と共に、出征する甥の久一を、「吉田の停車場(ステーション)」まで見送りに行く。汽車が走り始め、最後の車両が見送りの一行の前を通る時、那美が「名残惜しげに首を出した」野武士と、思わず顔を合わせた場面を目の当たりにする。野武士の顔はすぐに消えて、那美は茫然として汽車を見送る。

「その茫然のうちには不思議にも今までかつて見たことのない『憐(あわ)れ』が一面に浮いている。」といい、「それだ！ それだ！ それが出れば画になりますよ」と那美の肩をたたき、「余が胸中の画面はこの咄嗟(とっさ)の際に成就したのである」との一文で、『草枕』は完結する。

参考/Biglobe 読書感想文 HP